

日本と西洋古典についての覚書（１）

—「受容」という視点—

渡邊顕彦

1. はじめに

西洋古典学の主な研究対象は、いうまでもなく紀元前9世紀頃から紀元後6世紀頃まで、いわゆる「古代」（西欧中世や東欧ビザンティン時代より前）の古代ギリシア語およびラテン語文献である。なお地理的にこれら文献が成立したのは北アフリカや小アジアを含む地中海地域であるが、少なくとも近世から現代にかけて圧倒的な量の、そして西洋古典研究者も必ず規範とすべき研究の蓄積が成されたのは西ヨーロッパ、および西ヨーロッパ出身者が少なからず移住し大学文化を作り上げた北米等の地域である。例えば西洋古典学が対象とする中でおそらく最古の作品である『イリアス』は小アジアのイオニアで初期の形が成立したと推定され、ひるがえって年代下限に近いアウグスティヌスは北アフリカで青年期までを過ごした没したわけだが、『イリアス』やアウグスティヌス研究を極めようとする者は英国やドイツ、フランス、イタリア、米国等で研鑽を重ねそこで継続されている研究に寄与するのが普通であり、数日間の遺跡見学ならまだしも長期間トルコやチュニジアで腰をすえて『イリアス』やアウグスティヌスを研究するというのはよほど変わっているとみられるだろう（考古学等他分野は事情が異なるが）。この点西洋古典学という分野は、後の時代文化を対象とする多くの他人文学分野

と比較し、時代軸と地域軸の間に大きなずれがある。また同分野はこの点において、その対象が成立したのが中国大陆であるにもかかわらず、国際的に無視出来ない重厚な研究の蓄積が（東アジア内では後発文明圏である）日本にある漢文学と似ているともいえる。

ところで西洋古典学は、実のところ古代ギリシア・ローマ文献学と言ったほうが正確なのに、何故普通「西洋」古典学と称されるのだろうか。また、データの共有がより容易になりつつある世界の中で、多くの場合西洋人でも地中海人でもない、日本にいる我々が2千年も前のギリシア語・ラテン語文献の読解やテキスト復元を他者に任せず、直接試みることの意義は何なのだろうか。少なくとも戦後日本においては、「西洋文化の源が古代ギリシア・ローマなのだし、西洋は近現代日本に多大な影響を及ぼしているのだから、日本人としても古代ギリシア・ローマ（の文献）を正確に知っておかなければならない」*¹というような基本的な考えがあった。しかしながらさらに考えると、「西洋文化」に「古代ギリシア・ローマ（古典）」が影響をおよぼした、もしくは受容されたという事も、どれほど自明なのだろうか。参考にすべき先行研究は後述するように多数存在するが、これらにももしかすると西洋近代中心的世界観によって見えなくなっている、また研究の中心となっている西洋でも見落とされている盲点があるのではないか。

古典受容は些末な、非専門的な事柄であり、真面目な西洋古典学者は難しい、非専門家には分からない古代文献の探求を禁欲的に行っていくべきだという意見もあるだろう。古典古代の歴史文化、古代ギリシア語・ラテン語の文献やその研究動向は当然、西洋古典学者が専門知識として把握すべきである。しかし専門知識を得た上で、それを生かす研究（研究が教育や啓蒙、翻訳とは違い、今現在の世界にとって新たな知見の獲得だとすれば）を行うことができる、また教育啓蒙の面でも私達の

*¹ 例えば呉（1949）、小堀（2015）88 参照。

専門分野の意義を非専門家に理解できる形でアピールできる、さらに非西洋にいる私達がその所在地を短所から長所に変換出来る下位分野として、古典受容があるということを、具体例を示し当論文およびその続編で示したい。

近年西洋古典受容研究が興隆している欧米と比較し、日本でこの研究は未だ散発的であるので、*2当論文ではまずその理論的枠組みや意義を簡潔に考察する。ある程度理解・共有されている枠組みがないと、受容調査もトリビア知識の寄せ集めのようになり、今まで受容研究で培われてきた知見の総体から遊離し分解してしまう恐れがあるためである。特に受容研究自体、若干それを先行し、対象も重なる古典伝統の研究とは基本的な立ち位置が異なることが理解される必要がある。この違いを理解した上で、西洋古典受容に関係する諸研究の中でも特に発展が期待できる、そして日本にいる私達により直接関わってくる、近世以降のラテン語文献、および非西洋における古典受容研究に焦点をあてて検討し、続編におけるより具体的な議論につなげたい。

2. 古典伝統（Classical Tradition）と古典受容（Classical Reception(s)）—映画『トロイ』はホメロスの「まがい物」か

いわゆる古典とその古典が成立した以降に成立したテキストの関係を探る際、古典伝統（classical tradition）と古典受容（classical reception(s)）という2つの対照的な見方がある。どちらかというと前者が古典的な見方で、後者はより新しく、「多様性」のような政治的トレンドにも敏感な動きである。前者を代表する（そして後者を重視する者も見過すことはできない）『西洋文学における古典の伝統』という名著がある

*2 勿論皆無ではない。日本における西洋古典学受容研究については次々回を参照。

が、*³英国出身で米国に移住した古典学者 Gilbert Highet がこれを世に出したのが 1949 年、そして米国ボストン大学にてドイツ出身の古典学者 Wolfgang Haase が米国出身の同僚 Meyer Reinhold と共に国際西洋古典伝統研究会 (International Society for the Classical Tradition) を設立したのが 1991 年である。また Highet と並ぶ英国系研究者 Bolgar の、その題目 (*The Classical Heritage and its Beneficiaries*) からして実に古典伝統的な俯瞰を強く感じさせる著作もその初版が 1955 年に刊行されている。^{*4} 対して、筆者も参考にしてきた古典研究者向けの受容理論解説が Charles Martindale や Lorna Hardwick (いずれも英国の古典学者) 等により著されたのが 2003 年および 2006 年、オックスフォード大学出版局の学術誌 *Classical Reception Journal* が創刊されたのが 2009 年である。ちなみにこの同誌のタイトルで *Receptions* と複数になっている理由も、解釈や文学的アプローチの多様性に配慮したからだと説明されている。^{*5}

古典伝統の見方は古典古代を出発点そして規範とする。すなわち、「ホメロス」、「ウェルギリウス」等模範的な古代作家やその作品が存在し、それらの影響が後世に及んだ、または後世の不完全、学習の不十分によりその影響が阻害され、夾雑物が生じたというような見方をする。この観点からは、ある古代作品とその影響を受けたとされる後世の事物を比較する際、類似点が重視される。相違点は、古典伝統の研究者から見ると、自身の興味・分野とは関係のない、他人が扱うべきものといえる。

正直に言うと、筆者も学生時代は古典伝統寄りの見方をとっていた。またこのアプローチを時代遅れのものとして完全に切り捨てることは古典学者の本性からしておそらく無理だろう。西洋古典文献学の基本中の基本は古代ギリシア語・ラテン語の正確な理解である。いわゆる死語を

*³ Highet (1953)。日本語訳はハイエット (1969)。

*⁴ Bolgar (1954)。

*⁵ Hardwick (2009) 2。

正確に理解すると言ってもどのように理解すればいいのかという問題があるが、筆者が実行を試みてきてきたやり方、また（次回にも取り上げるが）過去 1000 年以上にわたりおそらく最も一般的だったやり方は、これら言語を生きた自然言語のように学習する、つまり文法規則等を教科書や辞書から学ぶ傍ら、古代テキストを読むだけでなく、古典語と古典文体を用いた作文も行つて、（言語や文体のレベルでは）古代人のように考える訓練をするという方法である。程度の差こそあれ、西洋古典学を学ぶ者の出発点として、古代ギリシア語・ラテン語文献を、それらが成立した時点での聴衆・読者の受容を可能な限りなぞって読解・受容したいという野心があるだろう。本格的に古典語学習にコミットするならば、それくらいの野心がないと始まらない。

しかし古代ギリシア語・ラテン語文献を「正確」に読もうと目標をたてて出来ることは色々あるのだが（先に言った「正確な」言語理解を始め写本校訂、古代～現代の注釈伝統、対象作品が成立した環境の考古学、文化人類学、歴史学的検証等、無数にある）、そういった作業を追及すればするほど気づかれてくるのは、古典作品をそのまま理解する、少なくとも古代人のように古典作品を理解するというのは実のところ永久に到達不可能な目標であるという気付きではないだろうか。古代ギリシア・ローマは現代の異文化と違い、移住や調査旅行を通して実体験が可能な対象ではない。どのようなアプローチから再構築を試みようと、得られるデータ群は常に断片的であり、隙間を想像で埋める必要がある。そして非専門家ならば想像で埋められた隙間を真実と捉えてしまっているかもしれないが、専門家ならば何処が後世の想像なのか把握しておく必要があり、専門的な教育を受けて思い知らされるのが、想像のラキューナが（それがどれほど「専門的な」考察に基づいているとしても）如何に多く広いかということである。

文献学はあくまでテキストを扱うものとしても、例えば『イリアス』を読解する際、その成立時の受容として豎琴と共に歌われているのか、

広場のような所で一人芝居あるいは講談のように演じられているのか、どちらを想像すべきだろうか。あるいは第 10 巻は、大抵どの校訂版にも入っているが、成立時に存在しなかった後世の挿入としてホメロス専門家は無視すべきなのだろうか。^{*6}現代において西洋古典研究をする者は、データを集めた末にある単一の解釈が絶対的に正しいのだと主張するような実証主義（英：positivism）に陥ってはならないのだという教えは筆者も大学院で繰り返し叩き込まれたものである。専門家として誠実に謙虚な態度で対象に向き合おうとすれば、西洋古典のテキストはたとえ一つだとしても（生成や発表過程まで考慮すると文学作品のテキストに一つの正しいものが存在するという考え自体、懐疑的に検討する余地がありはするが）^{*7}解釈は多様であると認めざるを得ない。ヤウスやイーザーの受容理論が世に出るよりはるか昔、プラトンがソクラテスを通して作者本人の意図をそのまま汲み取れば正しい解釈になるのであるという古典的な見方を否定してみせているではないか（Pl. Ap. 22b-c）。また私達の学問上の祖先であるアレクサンドリア時代以降の古代注釈者達も、正しい解釈に拘っているものの、屢々複数の異なる意見を記録している。^{*8}

ある古典作品の後代に対する「影響」を私達が論じるならば、その古典作品が元々持っている「意味」を知っていなければはじまらない。しかし古典作品自体の意味、そしてしばしばテキスト自体にすらゆらぎがあるということを謙虚に認めるならば（西洋古典文献学の目的が究極には到達不可能だからこそ、アレクサンドリア時代から営々 2000 年以上もこの分野が続いているともいえようが）、専門家にすら実は完全に把握出来ない物の「影響」を論じようというのも正に本末転倒である。^{*9}

^{*6} このあたりの議論については、例えば、West (2011) 3-5、233-234、川島 (2014) 249-262 参照。

^{*7} 例えば Reynolds (2013) 215-217 参照。

^{*8} 例えば Reynolds (2013) 12-14 参照。

^{*9} Martindale (2006) 4-7 参照。

（ちなみに受容研究において、「影響」というタームの使用は極力避けられている。）特定の正しい解釈がそもそもあるのかどうか分らない、そして完全には再構築不能な古代文化において成立し最初に受容されたテキストを後世の誰かが正しくあるいは誤って解釈しているなどどうして言えようか。いっそのこと古典古代という原点を遠く離れた文化環境における受容という現象の調査研究を、後者にも十分配慮しつつ行うことは、より広い視点から古典の価値を見直すことにつながるのではないか。

ここで 2004 年公開の『トロイ』という映画を一つの例として、受容研究をする際、どのような側面や要素に注目するのかを示したい。ただし以下の議論はあくまでも受容研究の方向性を明らかにするための例である。古典学者による『トロイ』受容研究は既に相当の量があり、*¹⁰筆者にはここで新たな知見を表明する意図はない。

ブラッド・ピット主演『トロイ』は発表当初、西洋古典専門家に大変不評であった。映画半ばでパリスとメネラオスの一騎打ちがあるが、原作ではアプロディテの助けでパリスが逃亡する（そしてその結果妻ヘレネから叱責される）のに、映画ではメネラオスが殺されているのでその段階でこれはとんでもないと観るのをやめたというような声もあった。またある米国古典学会の重鎮はこの映画を「ホメロスのまがい物」（travesty of Homer）と呼んだ。^{*11}しかし興行的にこの映画は大成功を収め、多額の製作費の倍以上の収入をもたらした。筆者も米国で教えていたころこの映画を複数回大規模授業で扱ったが、学生達には常に好評であった。しかし古典専門家からするととんでもない古典改悪の映画が一般観衆から受け入れられたということ自体、象牙の塔と（大学生を含む！）外部社会との乖離を如実に表していて興味深い。大衆が無知蒙昧だから映画が人気を博したのだという見方も出来るが、それでは折角ハ

*¹⁰ 最近の成果として例えば 10 名の専門家が協力執筆した Winkler (2015) がある。

*¹¹ O'Donnell (2004) 6。

リウッドが資金や人材を投じて古代ギリシアの宣伝を行ってくれたのに対してあまりな態度ではなかろうか。少なくとも学生集めが重要な課題である欧米の西洋古典学界にとって、『トロイ』のような映画は大変有り難い。

西洋古典学者として、一般大衆がこの映画の何に魅力を感じたのか精査し、それを西洋古典伝統の中で理解されてきた『イリアス』の価値と比較すれば、研究のヒント、あるいは少なくとも非専門家にも受け入れられやすい一つの成果が得られるのではないだろうか。また日本にいる西洋古典学者は、より具体的に日本におけるこの映画作品の受容（映画評論家や一般観衆の感想）を読み込み、平家物語や侍映画等、ある程度類似した我が国独自の文化伝統にも配慮した上で、上記と併せて日本という文化環境ではこのような受容がされたという報告ができる可能性もある。受容研究においてまず行えることとして、古典を受容した作品が更にどのように多様な文化環境において受容され、それによって古典が（専門家の理解と比較して）どのように変容し拡散したのかという調査と情報整理がある。

ただその準備として、受容した作品が、専門家の理解する古典とは如何に違う形で古典を提示しているのか、ある程度まとまった意見が必要になる。筆者なりにまとめると、映画『トロイ』では、1) 神々が不在である、2) 貪欲な暴君アガメムノンとDV夫メネラオス対、虐げられる妻ヘレネと彼女を慰める優しいパリス（そして彼等を受け入れる度量の広いトロイア人達）という善悪の対立、そしてそれに巻き込まれ苦悩しつつも自分の友情やトロイア人捕虜ブリセイスとの恋愛感情に忠実になろうと決意する、（現代的西洋的な感覚からすると）大変男らしいアキレウスというような、分かりやすいキャラクター設定、3) 悪の兄弟アガメムノンとメネラオスがトロイア人達に成敗される一方、パリス、ヘレネ、ブリセイス等は陥落するトロイアから生き延びて脱出するというような、これも分かりやすい勧善懲悪的プロット、という主に3点の

改変があるといえるだろうか。ちなみに受容研究では、古典伝統のアプローチとは対照的に、古典と受容作品の類似ではなく、相違に注目する傾向にある。また受容しているからには類似点があるのは当然なので、相違点を明らかにする方が学問的に有意義であるともいえる。

そしてこれら相違点と、専門分野的な『イリアス』理解を比較すると、後者で強調されがちである、人間を超える神々の存在やその神々さえも逆らえない運命（モイラ）、またホメロスの戦士規範のような、世俗的かつ平和主義的な現在ではおそらく一般受けしない要素が映画では見事に抜け落ちていることに気づく。これら相違点を明らかにした上で、「だから現代社会は駄目なのだ、古典を規範として啓蒙しなければいけない」風の議論に導いていくことも可能ではあるが、今現在の大学教育のような場でより現実的なのは、映画の鑑賞をきっかけに（あくまでも専門家が理解する）古典古代と、現代の文化環境や「期待の地平」（horizon of expectation）^{*12}との違いを論じること、そして古典古代の特徴の認識や、現代人にとっては普遍的に感じられる価値観の通時的な特殊性に気づかせるというふうなアプローチであろう。

ここで幾つか、受容研究でよく使われるタームを映画『トロイ』とからめて説明したい。まず『トロイ』は原作をかなり思い切って適応化（domesticate/domestication）したものと言える。つまり、現代の感覚に馴染みやすいように変容している。似て非なるタームとして専有（appropriation:最近は「盗用」とも訳されるようであるが）があるが、例えば『トロイ』が善玉のアキレウスあるいはトロイア人達を現代西欧人達のように、悪玉のアトレイデス兄弟を現代西欧に敵対する別勢力のように描き、作中にみられる構造を明らかに現代の状況にあてはめてプロパガンダ的メッセージを発していればこのタームが使えるが、この映画ではそこまで露骨な古代の利用は無いと筆者は考える。ちなみに適応

^{*12} これら用語の多くは Hardwick (2003) 1-11 でも解説されている。

化や専有は古典受容には屢々見られる傾向だが、真逆の傾向として異質化 (foreignization) というものがある。例えば、少し古いが古典学者の間では比較的評判が良い 1969 年公開の『サテリコン』というイタリア映画がある。これは断片的に現存するペトロニウス作『サテュリコン』を基に、古代ローマを正に異質の、現代人の感覚からずれていて気持ち悪い世界として描いている。^{*13}少なくともここ 2, 30 年ほどの西洋古典学では、古典古代と現代社会の間にある文化的距離 (cultural distance) を強調するのが専門家にふさわしい態度とする雰囲気があり、反対に適応化や専有は素人的なアプローチとして警戒・排除するのが一種の流行ではある。だからであろうか、フェリーニ監督の『サテリコン』はいわば玄人向けの古代ローマ受容として評判が良いし、受容研究全般も、古典と後代受容作品の相違点に注目するのでこの流れに合致していると言える。

しかしながら、異質化も行き過ぎると考えものである。まず古典古代が現代人にとって異質だと言いたてることが、西洋古典の現代社会においての孤立をさらに推し進めてしまうのではないかという政治的な懸念があるが、それは置いて学術的に考えても、古典古代と現代が違うと言い切るのは、この 2 者それぞれを単純化・単一化し過ぎているのではないか。再度『トロイ』と『イリアス』を例として取り上げると、前者は現代的であり後者はそれとは完全に異なる文化の産物であると言えきれぬのか。前者の要素が古代にも認められ、逆に『イリアス』の古代的・非現代的だと言われる側面が実は現代に見られることはないのか。トロイア伝説を非神話化 (demythologise)、歴史化 (historicise) する試み、さらにアキレウスを、戦争を捨てて愛を選ぶロマンチックな若者として描こうとする試みは、実は紀元後 1 世紀から 5 世紀頃までに古代ギリシア語およびラテン語で書かれた古代末期の物語群に既に表れている。^{*14}

^{*13} Paul (2009) 参照。

^{*14} これら物語群については例えば Merkle (2003) 参照。

古代にも活発に行われていた古典受容に敏感であれば、映画『トロイ』の一見現代的な要素も、ホメロスおよびイリアス伝説の古代における受容に既に明確に認められるある方向性に沿っているといえる。

また、「我々現代人」は、筆者も含めて受容研究でよく使う表現ではあるが、特に非西洋人である私達こそ、「現代」の多様性に配慮する必要がある。例えば『イリアス』で描かれるホメロスの戦士規範は驚くべき凶暴性を伴い、私たちのいる大学のような環境からすると非常に異質に感じられるが、今巷を騒がせる中東起原のテロリスト集団も様々な点で類似する文化規範を持つのではないか。^{*15}近現代においても、戦争従軍したあるいは類似した過酷な体験があるものは『イリアス』や『オデュッセイア』をより深く理解できるという指摘はなされているし、^{*16}イラク帰還兵の学生から筆者も米国で同様の感想を聞いたことがある。古典受容研究者は「伝統」や、「古典の規範」からの「影響」という一方的・垂直的・硬直的な見方には懐疑的でありつつも、他方では古典古代およびそれを受容する側の多様性にも目配りし、この２者が異なりつつも重なり合う部分がある可能性にオープンである必要がある。近刊のギリシア・ローマ神話解説^{*17}の表現を借りれば、受容を含めた西洋古典学習・研究（人文学全体と言ってもいいかもしれない）は「世界を読み解くため」であるといえようか。特に教育の場で西洋古典は学生の視野を狭めるのではなく広めることに貢献すべきである。

ただ受容研究の視野を最大まで広げたところで、一転、焦点を絞って文献学的な側面もみておこう。受容研究においては、受容点（point of reception）における、受容作品の作者と古典伝統との繋がりを細密に調査・検証する作業も有意義かつ専門性を生かせる場合がある。一言に古典を受容したと言っても、受容の通過点としての作者はその教育課程

^{*15} Vlahos (2014) 参照。

^{*16} Nicolson (2014) 120-123。

^{*17} 庄子 (2016)。

で西洋古典を原語あるいは翻訳で読んだのか、あるいは演劇、映画、漫画等、別の受容作品を通して間接的に触れているのか。原語テキスト本体、その解釈・翻訳、受容作品、様々な段階でのゆらぎ・変容に注意する受容研究者ならば、例えば受容作者が古典テキストの校訂版と専門的な注釈を参考にしてしている証拠があるとすれば、その校訂版や注釈が何なのかを特定し、それらの特徴が受容作品に反映されているのか否かを検証するのは楽しい作業であろうし、専門分野と受容作品がどう繋がっているかが明らかになれば前者の意義の再確認にもなろう。あるいは（日本ではこの場合のほうが多いが）翻訳や2次的、3次的な解説を使っている場合も、後者が何時何処で誰によって成されたのか検証することにより西洋古典の教育研究史に繋げていくことができる。例えば映画『トロイ』の監督およびプロデューサー Wolfgang Petersen は出身地ドイツのギムナジウムで6年間古典ギリシア語を学び、ホメロスも原語で読んでいたと報告されているが、*¹⁸彼が使った教科書や彼を教えた教師の説明は映画に見られる現代への適応化とどう関係しているのか。流石ドイツの古典教育もハリウッドの大衆性には負けたのか。もちろんこの問題を調査するにあたっては、受容点（Petersen 自身や彼が学習したハンブルグのギムナジウム）に近く、未公刊データにもアクセス容易な研究者が圧倒的に有利である。同様に、日本における西洋古典受容を研究するならば日本にいる研究者が断然有利である。

3. 古典受容と新ラテン語（Neo-Latin）——インド総督のラテン語詩

西洋古典受容は、専門的な古典言語や文献学とは関係のない素人的な下位分野だと誤解されることが多い。これが誤っていることは上項で示したつもりであるが、非常に高度なラテン語知識が要求される別分野で

*¹⁸ Winkler (2007) 5 (‘Editor’s Introduction’) 参照。

も西洋古典受容の枠組みをあてはめることが可能であり、その枠組みがないとそもそも分野自体の意義が見えにくくなる、ということをこれから示したい。この分野は新ラテン語（Neo-Latin）である。

ただ「新ラテン語」（Neo-Latin、独 Neulatein）というのは確実に「西洋古典学」よりも馴染みが薄いタームであろう。実はこれも筆者の仮提案に過ぎず、試しに今回（2016年12月13日）学術誌データベース Cinii で「新ラテン語」を検索したところ、「田中秀央著『新ラテン語文法』」を含む論文題目しかヒットしなかった（勿論田中の文法書は当該タームとは関係が無い）。なお「ネオ・ラテン」（等）^{*19}のタームがほぼ同義である程度使われていることが確認出来るが、筆者としては「古典ラテン語」、「中世ラテン語」等となるべく対応する呼称が欲しいので、ここでは仮に「新ラテン語」を提案しておく。

ここでいう新ラテン語とは、14世紀中葉、ペトルカやボッカチオを初めとする人文学者達によって使われ始めた、近世以降のラテン語（およびそれを用いて作成されたテキスト群）を指す。「人文ラテン語（Humanistic Latin）」「近世ラテン語（Early Modern Latin）」等で用が足りる場合も確かに多い。しかし Neo-Latin の時代領域は現代も含む^{*20}ので、以上のタームは厳密に考えると不十分である。とはいっても新ラテン語は、例えばイタリア語のような、古典ラテン語と異なる言語ではない。古典ラテン語に出来るだけ近づけた、近世以降使用されてきたラテン語と言ってもよい。^{*21}なので、「ラテン語（Latin）」と呼ばばよく、新しいタームの必要は無いのではないか」という意見も耳にすることがある。しかし「古典ラテン語」（Classical Latin）、「中世ラテン語」

^{*19} 伊藤（2005）、猪俣（1993）、伊藤（1989）。いずれもフランスと関係のある新ラテン語（または「ネオ・ラテン」）文学を扱っている。

^{*20} 現代におけるラテン語使用については例えば谷（1992）参照。ただこれもしばしば誤解されることだが、新ラテン語（Neo-Latin）は現代ラテン語も含むが、それに限定されず、あくまでも近世以降のラテン語であることに注意。

^{*21} 伊藤（2005）131-135 参照。

(Mediaeval Latin) 等のタームが一般的に使用されている以上、近世以降の「新ラテン語」も時代区分としておそらく有意義であるということと、最近欧米で Neo-Latin を冠した学界活動が盛んであるという理由から、ここでは暫定的に「新ラテン語」というタームを使わせてもらう。

近刊の新ラテン語総合解説によると、近世以降のラテン語を意味する Neo-Latin の使用は、18 世紀後半から 19 世紀始めのドイツ語表現 (Neulatein, neulateinisch-等) に遡れるという。^{*22}英語では Neo-Latin が 1973 年に国際新ラテン語学会 (International Association for Neo-Latin Studies) にて正式に定義・承認され、また 1977 年にルーヴアンカトリック大学の西洋古典文献学教授 Jozef Ijsewijn が新ラテン語の包括的なガイドブックを出版したことがこの分野の周知・進展に大いに寄与した。^{*23}Ijsewijn の博学的な解説は 1998 年まで改訂・拡張され、今でも当分野研究の出発点として欠かせない。なお新ラテン語研究と西洋古典学の関係もなかなか微妙ではあり、英文学やルネサンス研究に表向き所属する研究者も中にはいるが、後述するように高度な古典ラテン語の習熟かつ古典古代の知識が無いとこの分野ではやっていけないため、筆者は西洋古典学の下位分野として新ラテン語を位置付けるのが適切であると信じる。この点、古典学研究で世界的に知られるウィーン大学で 2000 年に従来の西洋古典学科が「古典文献学および中世・新ラテン語学科」(Institut für Klassische Philologie, Mittel- und Neulatein) と改名されたことは英断であり歓迎すべき動きである。ちなみに同大学学科は 2015 年夏に第 16 回国際新ラテン語学会大会を主催し、300 件ほどの発表報告が行われ盛況であった。

さて新ラテン語は 14 世紀中葉から今にいたるまで使われ続け、そのカバーする範囲は地理的にも分野的にも非常に広い。新ラテン語テキストの成立した地域としてはヨーロッパがやはり圧倒的な中心とはなる

^{*22} Knight (2015) 1。

^{*23} Ijsewijn (1990) v 参照。

が、アフリカ、アメリカ大陸、中近東、アジア等でも使用が確認出来、^{*24}全世界に及ぶといい。また文学のみならず哲学、歴史学、医学、ほか科学諸分野でも重要な業績が新ラテン語で成されていることは、ペトラルカから始まりエラスムス、トマス・モア、ライプニッツ、レオナルド・ブルーニ、ウィリアム・ハーヴィー、ニュートン等、ごく限られた著者名を挙げれば理解されるだろう。

しかしながら、ラテン語が近世以降も広く長く西洋で使用されてきたという理解はあっても、それは単に共通語だったので仕方なくそうしていたのではないか、要するに他言語（後に共通語となったフランス語、英語等）と代替可能なメディアムでしかないという認識であれば、わざわざ新ラテン語という研究対象を作らなくてもよいだろう。ラテン語そのものを言語として学習し（もしかすると翻訳ソフトも活用し）、必要に応じてエラスムス等の対象文献を翻訳していけば良い話である。だが、ここで西洋古典学者（および西洋古典学を土台にする新ラテン語研究者）がエリート主義のそしりを恐れず、声を大にして主張すべきことがある。ラテン語（および古代ギリシア語）は単に文法が煩雑なインド・ヨーロッパ諸語の比較的古い形態を留める言語ではない。2千年以上途切れのない、良好な記録の残る使用歴と、常にその初期段階（ラテン語では特に紀元前後に成立した古典テキスト群）を意識しそれに戻ろうとする強い回帰傾向・規範性・保守性を持つ言語である。カエサルやキケロ、ウェルギリウスやオウィディウスの言語・文体を完璧に守りつつ近世以降また地中海地域以外で現実に則した言語活動を続けるということは、もちろん完全には両立不可能な目標である。一方では印刷製本技術や物流等の進歩のおかげで古典文献の記録や古典語文法・文体の整理・理解が進み、他方では地理的・文化的・物質的にますます古代から異なっていく近世以降の世の中で、新ラテン語使用者はハードルが高くなって

^{*24} Ijsewijn (1990) 54-327、Knight (2015) 395-573 等参照。

いくその不可能に挑んできたのであった。ちなみに新ラテン語という現象も、その文体は古代の方向を向きつつ、その内容は（古代以外の対象を描写するため、そして幅広いギリシャ・ローマ古典を熟知した上で新たなテキストを期待する聴衆の要望に応えるため）古典そのものの超越を目指しているという意味で、古典受容という模倣（imitation/imitatio）を基礎としつつそれを超える「創造的模倣」（emulation/aemulatio）を常を含むとみるのが適切である。^{*25}

実際に古典ラテン語を学習しそれを近現代の状況にあてはめて使用することを試みないとおそらく実感しづらいことではあるが、ドイツ語やフランス語等近現代語と新ラテン語のような擬古典語はやはり学習の難易度が異なるというか、単に語彙等の変換に留まらずしばしば世界観そのものの翻訳や注釈が必要になる。例えば「独創性」（originality）のような表現は、概念自体がおそらく古典古代に存在しないので、これが近現代人にとって何なのか、どう言えばキケロやカエサルに理解してもらえるのかははっきりさせた上で何らかの説明あるいは言い換えをしなければならない。あるいは、「家族」のような、基本的かつ普遍的ではないかと思われる語彙さえ、古典ラテン語では完全に対応するものが無い。よって、familia（（奴隷等を含む）所帯）、domus（家屋）、sanguis（血）、proles（子孫）、lar（家庭守護神）、focus（囲炉裏）等様々な類義語を文脈やジャンル、韻律の必要性もみて使い分けなければならない。^{*26}分野、文学ジャンルや想定される読み手、作者個人の習熟度等様々な要素によって程度は左右されるものの、新ラテン語は常に古典ラテン語が成立した紀元前後と後世とのすり合わせを、言語文体レベルではなるべく前者に合わせつつ行ってきた。

ここで気づかれると思うが、新ラテン語は、常に古典を「規範」として強く意識しているという点では古典受容とは逆方向を向いているもの

^{*25} Knight (2015) 234 参照。

^{*26} 例えば Mountford (1938) 28-31 参照。

の、常に片足は近世以降に置いている、そしてそれを有意義に研究する為には対象テキストが成立した後者の環境を十分検討する必要がある、さらに究極にはこれも古典伝統の多様性および古典古代と後世との対流関係を扱うという面では重なり合っている。最近著しい成果を挙げている複数の新ラテン語研究者が古典受容においても業績を成していることは偶然ではない。^{*27}新ラテン語も、語彙文法から始まり文体、韻律、そしてしばしばそれらが表現する古典古代の世界観まで包括する大きなシステムの受容ととらえれば西洋古典受容の一種であると理解することは十分可能である。^{*28}ちなみに古典を規範とするという意味では古典伝統のアプローチこそ新ラテン語研究と親和性があるのではないかと思われるかもしれないが、先に挙げた Highet の基礎的文献も新ラテン語への言及はいたって少なく、その価値について否定的である。^{*29}もし研究者自身が古典を最高の規範と信じてしまえば、新ラテン語もその劣化コピーに過ぎないわけで、研究する価値を認めないのは実のところ当然である。受容研究でされているように、後世の受容した側の能動性を認め、どのようにして古典を吸収利用しているのかというプロセスに関心を持たなければ新ラテン語の価値も見えなくなる。

西洋古典受容と新ラテン語研究のもう一つの共通点は、西洋古典プロパーと比べ開拓の余地が非常に大きいことである。新ラテン語テキスト

^{*27} 例として Craig Kallendorf (Texas A&M 大学教授、International Association for Neo-Latin Studies 2012-2015 年会長)、Florian Schaffner (インスブルック大学准教授、Ludwig Boltzmann 新ラテン語研究所所長)、Victoria Moul (キングスカレッジ講師、英国新ラテン語詩専門家) が挙げられる。彼等にはそれぞれウェルギリウスの近世受容、映画『トロイ』、近世英国文学における古典受容についての業績がある。

^{*28} とはいいつつ、欧米の大学研究教育の現場では、両者は微妙な関係にあるというのが現状ではある。西洋古典受容は古典語が苦手な学生を繋ぎとめる手段としてしばしば機能するが、逆に新ラテン語は古典ラテン語の高度な習熟がないと扱えないという事情が影響していると思われる。西洋古典受容と新ラテン語研究を研究と教育で両立させている若手学者の述懐としては Victoria Moul のブログ記事 <http://www.open.ac.uk/blogs/CRSN/?p=61> (2016 年 12 月 15 日アクセス) 参照。

^{*29} Highet (1953) 85-87、134-135。

は図書館や文書館で顧みられないまま眠っているものがあまりにも多く、参入しようとも何処から手を付けて良いのか分からず困るくらいである。今回は新ラテン語とはどのようなものであるか示すための一つの例として、たまたま筆者の目に留まった東京大学西洋古典学研究室ブリンク文庫所蔵詩集から一点の詩を、以下簡単にとりあげたい。

ブリンク文庫とは、ベルリン出身で後にケンブリッジ大学の教授となり、1994年に没した Charles Brink 教授が生涯をかけて収集した約 6000 冊の研究書から成るコレクションであり、現在は東京大学西洋古典学研究室の管理下にある。^{*30}同文庫は 1500 年代の貴重な印刷版から 1990 年代に至る研究書まで網羅しており、その量かつバランス良い分野全体への目配りには圧倒される。ただその中にどういう事情からか、1795 年に 3 巻印刷されたイートン校生徒達によるラテン語・古代ギリシア語詩集の合冊されたものが入っている。このような生徒・学生による古典語詩集はそれ自体珍しいものではないが、伝統的・禁欲的な西洋古典学の神殿のようなブリンク文庫の中では少々目立つ存在である。ちなみにこの詩集（以下イートン詩集と称する）の詩は、もちろん古典そのものではなく 18 世紀の生徒達自身が作詩したものである。^{*31}イートン詩集 1、2 巻にはラテン語詩が合計 200 編近く、3 巻には古代ギリシア語詩が 27 編収められている。それぞれの詩の巻末あるいは巻頭にある目次には作者の名も付され、その中に 1798 年から 1805 年にかけてインド総督を務めた初代ウェルズリー公爵リチャード・ウェルズリーもみえる（彼はワーテルローでナポレオンを撃破したアーサー・ウェルズリーの兄でもある）。^{*32}彼はラテン語詩を 6 点、古代ギリシア語詩を 1 点寄稿している。このうち、第 1 巻の最後を飾る 50 行のエレゲイア調ラテン語詩を

^{*30} 久保 (2001) 参照。

^{*31} ただしある詩には（別の新ラテン語詩からの）剽窃が混じっていることが、正直にも目次で申告されている（*quaedam in hoc a poematibus Italorum surrepta deprehendi...*）。Eton (1795) index ad 'Harvest...P.310'。

^{*32} 彼の事績については例えば浜渦 (1999) 69-75 参照。

手短に見てみよう。なお参考のため句読点・綴りを標準化したラテン語原文と本稿筆者による英訳を補遺として付す。

この詩は 1779 年の日付があり、ウェルズリーが卒業してイートンの別れを告げるというのが主な内容である。イートンから旅立つ自身をまず新米水夫になぞらえ（1-10）、それからオックスフォードで慣れない幾何学や弁論術を学ばされることへの恐れ（11-20）、大学卒業後の将来への不安（21-26）、慣れたイートン校やその周辺を離れなければならないという嘆き（27-38）と続き、最後に自分にラテン語詩を教授した教師への感謝が語られる（39-50）。内容はかなり一般的かつ普遍的であるものの、オックスフォードで予想される学習については少々具体的に述べられている。また将来インド総督にまでなった人物が未知の将来への不安を切実に語っているというのも読者からすると興味深い点ではある。

韻律は学校教育の定番、エレゲイア 2 行詩である。エレゲイア 2 行詩はラテン文学ではオウィディウスにより整備使用されたものが標準化され以降頻繁に踏襲されているが、その韻律が学習者にとって必要な事項をほぼすべて含んでいることから伝統的に作詩教育の入り口とされ、次回詳しく述べるようにキリシタン時代の日本人もこの韻律を学び使用していたことが確認出来る。

オウィディウス風のエレゲイア 2 行詩は各 2 行目が 2 音節語で終わることが望ましいとされ、ウェルズリーの詩はこのルールを守っている。ほか基本的な音節長短のルールも完全に守られている。エレゲイア 2 行詩では各行の最初の脚が長短短のダクテュロスであることが望ましく、例えば 19 世紀英国の作詩マニュアルでも長長のスポンダイオスで始まる行は最多でも 6 行中 1 行に留めるよう指示されているが、^{*33}ウェルズリーでは 50 行中 8 行（3、15、17、20、27、29、33、50）がそうっており、このルールも彼はぎりぎり守っている。ペンタメトロス行

^{*33} Lee-Warner (1885) 26。

(各2行目)のカエスーラ(区切り)も完全に守られている。しかしダクテュロス行(各1行目)のカエスーラは前置詞の使用や母音脱落により2行(9、35)が不完全である。このような韻律の逸脱はウェルギリウスも行っているので大きな欠陥ではないとの見方もできる^{*34}が、しかし例えばキリシタン時代の日本で教えられていたエレゲイア調詩の規範ではおそらく許されていなかったものである。おおまかにみて韻律上ウェルズリーの詩はかなり良い線まで行っているものの、新ラテン語伝統の中で最高度に厳格なレベルには達していない。

先ほど述べたように詩の内容は具体的な個性のようなものは見られないものの、逆に盗用を疑う理由も特にない。*fera murmura ponti* (3: Ov.Tr.1.11.7), *senior aetas* (21: Ov.Am.2.4.45) はオウィディウスから借用したフレーズだが、この程度の借用はもちろん擬古典作詩では推奨されることはあれ非難されることではない。10代の少年が書いたものとしては(教師の訂正や提案もあったろうが)この詩は古典の用法や韻律もおおむね守っており良い出来だといえる。

この類の生徒や学生、卒業生達によるラテン語および古代ギリシア語詩は英国のみならず近世以降ヨーロッパで膨大な量のものが作られ遺されており、調査研究も今のところ非常に散発的ではあるが、これらを専門的に調査し、国や時代による古典韻律、語彙、テーマ等受容傾向の違いを調べようという動きも既に始まっている。例えば17世紀以降の英国では、ロマン派を先取りするような個人的・個性的な精神内面の描写が新ラテン語詩に表れているのではないかという指摘が最近なされている。^{*35}

なお以上取り上げた詩は、リチャード・ウェルズリーの死の一年前となる1841年に出版された彼のラテン語・古代ギリシア語・英語詩集に

^{*34} 例えば Lupton (1885) 25-26、Winbolt (1903) 97-98、Postgate (1923) 70-71 参照。

^{*35} Moul (2016)。

も採録されている*³⁶がイートン詩集とは細部が多く異なっている。これら相違点は韻律等の観点からおおむね改善といえるが、本稿補遺では明確な誤りの訂正（43:tenellam>tenellum）を除いてイートン詩集に沿ったテキストを採用し、ほか相違点はテキスト後の apparatus に記録した。これら 1841 年版でみられる書き直しもウェルズリー自身あるいは別の編集者が注意深くラテン語テキストを検討していた証としては興味深い。

新ラテン語（およびそれより総量は少ないが、近世以降の古代ギリシア語）は、先にも述べたように膨大な量の、しかも言語的にはきわめて良質なテキストがあるにもかかわらず、またその作者や一次受容者達が多く社会的指導層に属するのにもかかわらず、*³⁷近年等閑視されてきた。一方でプロパーの西洋古典学者からすればこれらは西洋古典の模倣物にすぎず、他方で近世以降を専門とする研究者は対象をそもそも読めないことが多く、言語的に理解出来てもこれらテキストの西洋古典受容から見た側面、例えば各種古典古代および他の新ラテン語テキストとの関係や文体、韻律のような事柄までは分析が難しいというような障壁があったかと思われる。しかし、欧米で西洋古典の教育を受けた研究者達による本格的な調査研究が始動し学問分野として受け入れられるようになった今、私達日本における西洋古典学者もこの、基本的に西洋古典テキストと同じ言語文体で書かれているがそれらとは対照的に学問的に未開拓な新天地のような研究対象があることを知っておくべきであると考え拙文で紹介させていただいた。更に、新ラテン語テキストの中には 16 世紀から始まり今日に至るまで、日本に直接関わりがあり、日本人および日本関係者ならではの調査・研究・鑑賞が可能なものも多数ある。こ

*³⁶ Wellesley (1841) 38-39.

*³⁷ 特に近世ヨーロッパでは貴族や王族等社会的指導層と中間層の間のパトロネージで新ラテン語文芸が重要な役割を果たしたことが明らかにされ、彼等のラテン語運用・受容能力も従来考えられていたより相当高度だったのではないかと示唆されている。例えば Sidwell (2012) および Schirg (2016) 参照。

れらは次回とりあげたい。

4. 非西洋と「西洋」古典

前述したように古代ギリシア語・ラテン語文献学とも呼ぶべき私達の学問分野は西洋古典学とも称されているが、何故そう呼ばれるようになったかの背景を考えるに、ドイツを始めとするヨーロッパの制度に倣って日本の大学制度が形成されていったのが 19 世紀後半以降で、その時代に西洋古典受容で言うところの欧米によるギリシア・ローマ古典のイデオロギー的占有化が著しかったことをこの「西洋古典学」という名称も示しているという理解もできる。この欧米の、特にいわゆる白人文化による古代ギリシア・ローマの占有化（自らの優越性の担保証明としての西洋古典利用）も近年西洋古典受容の側面から活発に研究されている。いわゆる「西洋」の優越性が自明のものではなく否定・懐疑・攻撃の対象にしばしばなる世の中では、この占有化の研究も、欧米における西洋古典学の歴史の振り返り、そして未来への展望を描くために重要であることは明らかである。ただいわゆる白人文化による古代ギリシア・ローマの占有化は、西洋中心の世の中で直接的にその帝国主義・植民主義の影響を受けたインドや米国のいわゆる有色人種の関係から論じられることが多かった。非西洋・非白人であり、（少なくとも直接的には）西洋の植民地にもならず、しかもかなりまとまった西洋古典受容史のある日本からも、非西洋世界における西洋古典受容の蓄積されてきた考察に独自の角度から寄与することができるのではないだろうか。

西洋古典と近現代の西洋中心帝国主義・植民主義との関係は様々な議論されてきた。例えばクセノポン『アナバシス』およびカエサル『ガリア戦記』は 19 世紀以降それぞれ古代ギリシア語とラテン語の初級購読テキストとして定番になっているが、単に言語的文獻的レベルが学習者に適切であるという以外に、イデオロギー的にこの 2 つのテキストが帝

国主義と親和性が高いということと無関係でないことは受容研究で明らかにされている。^{*38}また別の例をあげると、大英帝国運営で19世紀半ば以降大きな役割を果たし、西洋における官僚試験制度の先駆けとなったインド高等文官採用試験制度（Indian Civil Service Examination）（その一つのモデルが四書五経を基にした中国の科举であったと言われるが）で古代ギリシア語やラテン語作文に英作文やインド諸語の知識より高い配点がされ、その結果（おそらく制度設計者達の意図した通りに）パブリックスクールからオックスフォード・ケンブリッジにわたり英国中上流階級によって相当程度独占された西洋古典教育研究と、彼等の帝国主義が共栄関係を築き上げていたことも詳細な調査により明らかにされつつある。^{*39}

しかしながら、いわゆる白人中心の帝国主義や人種差別主義と西洋古典学が深く結び着いていたことは明らかであるとして、それだけの認識に留まると、これら負の歴史が克服されたのだから西洋古典学も淘汰、あるいは縮小されるべきでないかという議論につながりかねない。同時に研究・認識が必要なのは、西洋古典学が近現代においてある種西洋中心・至上主義の防壁のような機能を果たしていたのにも関わらず、同分野を学習した非西洋人もそれを乗り越え、見方を変えると社会の偏見を逆手に取って西洋社会の中心に乗り込んでいったという現象ではないだろうか。先述のインド高等文官試験ではごく一部ではあるが、インド現地人も（おそらく制度設計者達の意に反して）古代ギリシア語・ラテン語で優秀な成績を修め合格・登用されたことが知られている。^{*40}また19

^{*38} 例えば Rood (2005)、Wyke (2012) 参照。

^{*39} Vasunia (2013) 193-235 参照。またより広く植民地インドを支配したイギリス人上流階級を一体化させるシステムとして機能した西洋古典学については Hagerman (2013) もわかりやすい解説をしている。

^{*40} Vasunia (2013) 223-228 参照。さらに極く少数のこれらの例を挙げて、インド高等文官試験制度は帝国諸民族に開かれており公平である（なので英国中上流階級以外の合格者が少ないのは英国白人の高性能の証明である）というような主張も当時からあった。

世紀終わりから 20 世紀初めの米国では、アフリカ系黒人には古代ギリシア語の精緻な統辞を理解出来ないというような偏見があったが、黒人奴隷階級に生まれた William Sanders Scarborough は南北戦争後、解放されて西洋古典学の教授となり、古代ギリシア語の文法教科書を著した。^{*41}より最近にはあるアフリカ系米国人の古典学者が同国黒人文学における広範な西洋古典受容を浩瀚な著書で検証している。^{*42}さらに時代は遡るが 16 世紀にラテン語を学び、書いたアメリカ大陸インディオや、^{*43}18 世紀にオランダの大学でラテン語の論文を書いた西アフリカ出身の解放奴隷のような例もある。^{*44}非西洋人や非西洋文化における西洋古典受容の調査研究は近年とみに進んでおり、多くの場合自身が非西洋人である西洋古典学者が彼等自身の出自を生かして行っていることは私達も参考にすべきだろう。^{*45}

次々回詳しくとりあげるように、日本人による日本における西洋古典受容研究も既に行われている。ただ（例外もあるが）上記のような欧米で行われている研究に比べ、理論的な枠組みや他の非西洋環境における受容との比較検証に弱く、今でも西洋中心に活発に行われている西洋古典受容研究との繋ぎの構築は発展途上であるように思われる。またこれも次々回紹介するが、その隙に比較的理論的裏付けのしっかりした、日本における西洋古典受容研究が英語圏やドイツ語圏等外国の研究者達によって行われ始めている。^{*46}日本でも、日本在住研究者ならではの、

^{*41} Ronnick (2005)、特に 1-19 参照。

^{*42} Rankine (2006)。

^{*43} Laird (2015) 529-531 参照。

^{*44} Parker (2010) 参照。

^{*45} 参考文献にも名を載せた Phiroze Vasunia (ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンギリシア語・ラテン語学科教授) と Patrice Rankine (リッチモンド大学副学長・古典学科教授) のほか、カリブ文化・文学における西洋古典受容を研究している Emily Greenwood (エール大学古典学科長・教授) が例として挙げられる。

^{*46} 例として Jacob (2016)、Kovacs (2016)、Palmeshofer (2013)、Kovacs (2011) があげられる。

そして世界で蓄積されてきた西洋古典受容研究に寄与する業績がこれから活発に生まれることに当論文および続編が貢献できれば幸いである。

5. おわりに―受容研究と現代日本から見た西洋古典の価値

初めに述べた通り、西洋古典学の直接の研究対象は紀元前9世紀頃から紀元後6世紀頃までに成立した古代ギリシア語・ラテン語文献である。これら自身に何らかの内的価値があるから、今に至るまで西洋古典学という学問が続いているのだろう。しかし西洋古典学の直接対象であるテキスト群がその後諸文明文化で途切れなく記憶され受容されてきたということも、西洋古典学の他分野と比較した際の大きな強みである。いうまでもなく古代ギリシア語・ラテン語テキストが地中海地域で最古のものでないことは、19世紀以降の（これも欧米主導で成された）研究調査によって明らかにされている。しかし古代エジプト文学や発掘粘土板から再発見された中近東文学と異なり、ホメロスやギリシア悲劇、キケロ、アウグスティヌスは成立以降、一度も途切れることなくまず地中海地域、それからヨーロッパにおいて原語そのままで読解受容されていき、さらにヨーロッパ文化の拡散に伴って様々な形で日本を含む全世界に伝えられてきた。

古典伝統の見方からすれば古典テキストや文化に内的価値があったから受容された、要するに受容は古典の価値そのものではないが価値の証明であるということになる。原語テキストがある程度正確に伝承され内的価値が生かされることによって野蛮なヨーロッパ西北部も文明化し、この（「正しい」、そして受容者の理解能力の証でもある）受容が西洋の優位を可能にしたのだという類の言説は、これまで幾度となく繰り返されてきたしこれからも繰り返されるだろう。^{*47}この見解が正しいのか

^{*47} 米国における代表的な例としては Hanson (2001) 参照。

誤っているのか、筆者は判断を保留する。しかし古典テキストの内的価値や西洋文明の優越性は一旦脇に置いておいて、受容歴を西洋古典の価値の証明ではなく、唯一のとは言わないが、その価値の重要な一部分として捉え直すこともできるのではないだろうか。

一つ比喻を使わせてもらおうと、テキストの受容歴は古銭のパatina（経年変化による表面膜）に例えられる。古代ギリシア・ローマの貨幣は、数千年の年月を経て多くは（金は腐食しないため、銀と銅に限られるが）緑、黒、茶、青等絶妙に変化した色をしている。古銭収集家はこういうパatina（銀銭の場合、トーンともいう）を珍重する。物理的または化学的にパatinaを除去し、鑄造されたばかりの時に近い状態まで戻すことも可能であるが、そうすると市場価値が大幅に下がってしまうため、もともとほとんど価値のない貨幣に実験的に行われる以外通常そのような手段は使われない。ひるがえって西洋古典学においては、特に近代以降、古代の対象テキストをとにかく成立当初の形を復元するという目標は自明のものであった。これは一種の努力目標としては今後も有効であろうし、受容対象が成立当初どのように受容されていたのかについての推測・理解は受容研究者にとっても必要である。ただそれに加えて、受容歴そのものが古銭のパatinaのように西洋古典文学や文化の魅力でもあり（極少数の例外を除き、受容歴がより薄い）他分野と比較した強みでもあるのだと認識し、研究や教育に生かす時が来ているのではないだろうか。^{*48}そこで私達に直接関わる西洋古典受容研究のさらに具体化した例として今回は日本関係の新ラテン語諸テキスト、次々回は西洋古典を受容した日本の小説や漫画等を取りあげたい。^{*49}

^{*48} このような機運は既にみられる。戸部 (2015)、庄子 (2016) (特に 17-37) 等参照。

^{*49} 本研究は JSPS 科研費 15K02385 の助成を受けたものである。

参考文献・資料（和文のち欧文）

- 伊藤玄吾 (2005) 「ネオ・ラテン文学の復権とジャン＝アントワヌ・ド・バイフ —『カルミナ』(1577 年)を中心に—」『フランス語フランス文学研究』87: 131-146
- 伊藤進 (1989) 「ブカナンのアンリ 2 世称賛詩をめぐる —16 世紀フランスに於けるネオ＝ラテン詩と俗語詩—」『中京大学教養論叢』30.1:175-191
- 猪俣賢司 (1993) 「ロンサールとミケーレ・マッロ —ルネサンスの俗語詩とネオ・ラテン詩の模倣—」『新潟大学都市教養部研究紀要』24:1-31
- 川島重成 (2014) 『『イーリアス』ギリシア英雄叙事詩の世界』岩波書店
- 久保正彰 (2001) 「ブリック教授の蔵書」『図書』2001 年 8 月号 14-17
- 呉茂一 (1949) 「西洋古典学」『日本の人文科学—回顧と展望』人文科学委員会:40-45
- 小堀馨子 (2015) 「映画作品に描かれた古典ローマのイメージ—スパルタクスの人物像の変遷を中心に」戸部純一・高名康文（編）(2015)『西洋古典のすゝめ（シリーズ・ヨーロッパの文化②）』成城大学文芸学部:87-114
- 庄子大亮 (2016) 『世界を読み解くためのギリシア・ローマ神話入門』河出書房
- 谷栄一郎 (1992) 「ラテン語は生きているか—現代ラテン語事情—」『奈良県立商科大学研究季報』3.1-3:165-176
- 戸部純一・高名康文（編）(2015)『西洋古典のすゝめ（シリーズ・ヨーロッパの文化②）』成城大学文芸学部
- 浜渦哲雄 (1999) 『大英帝国インド総督列伝イギリスはいかにインドを統治したか』中央公論新社
- ハイエット・ギルバート（著）柳沼重剛（訳）(1969)『西洋文学における古典の伝統（上）（下）』筑摩叢書
- Bolgar, R.R. (1954) *The Classical Heritage and its Beneficiaries*. Cambridge University Press
- Eton (1795) *Musae Etonenses vol. 1*. Stafford
- Hagerman, C.A. (2013) *Britain's Imperial Muse: The Classics, Imperialism, and the Indian Empire, 1784-1914*. Palgrave Macmillan
- Hanson, V.D. and J. Heath (2001) *Who Killed Homer? The Demise of Classical Education and the Recovery of Greek Wisdom*. Encounter Books
- Hardwick, L. (2003) *Reception Studies*. Oxford University Press

- Hardwick, L. (2009) 'Editorial', *Classical Receptions Journal* 1.1: 1-3
- Hight, G. (1953) *The Classical Tradition: Greek and Roman Influences on Western Literature*. Oxford University Press
- Ijsewijn, J. (1990) *Companion to Neo-Latin Studies Part I: History and Diffusion of Neo-Latin Literature (second edition)*. Leuven University Press
- Ijsewijn, J. and D. Sacré (1998) *Companion to Neo-Latin Studies Part II: Literary, Linguistic, Philological and Editorial Questions (second edition)*. Leuven University Press
- Jacob, F. (2016) 'Antike Moderne - Japans Modernisierung und die Adaption westlicher Geschichtstradition', *CUNY Academic Words Publications and Research Summer 7-12-2016* <http://academicworks.cuny.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1033&context=qb_pubs> (accessed 3/16/2017)
- Knight, S. and S. Tilg (eds.) (2015) *The Oxford Handbook of Neo-Latin*. Oxford University Press
- Kovacs, G. and C.W. Marshall (eds.) (2011) *Classics and Comics*. Oxford University Press
- Kovacs, G. and C.W. Marshall (eds.) (2016) *Son of Classics and Comics*. Oxford University Press
- Laird, A. (2015) 'Colonial Spanish America and Brazil', in S. Knight and S. Tilg (eds.): 525-540
- Lee-Warner, H. (1885) *Hints and Helps for Latin Elegiacs*. Clarendon
- Lupton, J.H. (1885) *An Introduction to Latin Elegiac Verse Composition*. Macmillan
- Martindale, C. (2006) 'Introduction: Thinking Through Reception', in C. Martindale and R.F. Thomas (eds.) *Classics and the Uses of Reception*. Blackwell
- Merkle, S. (2003) 'The Truth and Nothing but the Truth: Dictys and Dares', G. Schmeling (ed.) *The Novel in the Ancient World (Revised Edition)*. Brill: 563-580
- Moul, V. (2016) *Neo-Latin Poetry, 1500-1700: An English Perspective*. Oxford University Press Online <<http://dx.doi.org/10.1093/oxfordhb/9780199935338.013.16>> (accessed 12/20/2016)
- Mountford, J. (1938) *'Bradley's Arnold' Latin Prose Composition*. Longmans
- Nicolson, A. (2014) *The Mighty Dead: Why Homer Matters*. William Collins

- O'Donnell, J. (2004) 'A Call for Proposals from Performance Committee', *American Philological Association Newsletter* 27.3: 4-6
- Palmeshofer, P. (2013) *Ovids Metamorphosen und Tawada Yōko: Rezeption eines lateinischen Werkes bei einer japanischen Autorin*. Diplomica Verlag
- Parker, G. (2010) 'Can the Subaltern Speak Latin? The Case of Capitein', in Y. Haskell and J.F. Ruys (eds.) *Latinity and Alterity in the Modern Period*. ACMRS: 241-258
- Paul, J. (2009) 'Fellini-Satyricon: Petronius and Film', in J. Prag and I. Repath (eds.) *Petronius: A Handbook*. Wiley-Blackwell
- Rankine, P. (2006) *Ulysses in Black: Ralph Ellison, Classicism, and African American Literature*. University of Wisconsin Press
- Reynolds, L.D. and N.G. Wilson (2013) *Scribes and Scholars: A Guide to the Transmission of Greek and Latin Literature (Fourth Edition)*. Oxford University Press
- Ronnick, M.V. (ed.) (2004) *The Autobiography of William Sanders Scarborough: An American Journey from Slavery to Scholarship*. Wayne State University Press
- Rood, T. (2005) *The Sea! the Sea! The Shout of the Ten Thousand in the Modern Imagination*. Overlook
- Schirg, B. (2016) *Die Ökonomie der Dichtung: Das Lobgedicht des Pietro Lazzaroni an den Borgia-Papst Alexander VI. (1497). Einleitung, Interpretation, kritische Erstedition und Kommentar*. Olms
- Sidwell, K. and D. Edwards (eds.) (2012) *The Tipperary Hero: Dermot O'Meara's Ormonius (1615)*. Brepols
- Vasunia, P. (2013) *The Classics and Colonial India*. Oxford University Press
- Vlahos, M. (2014) 'What Homer's Iliad Tells Us About the Islamic State', *Huffington Post* <http://www.huffingtonpost.com/michael-vlahos/what-homers-iliad-tells-u_b_5759312.html> (accessed 12/12/2016)
- Wyke, M. (2012) *Caesar in the USA*. University of California Press
- Wellesley, R. (1841) *Primitiae et Reliquiae*. Gulielmi Nicol.
- West, M.L. (2011) *The Making of the Iliad: Disquisition & Analytical Commentary*. Oxford University Press
- Winbolt, S.E. (1903) *Latin Hexameter Verse: An Aid to Composition; With Key*. Cambridge University Press

Winkler, M. (ed.) (2007) *Troy: From Homer's Iliad to Hollywood Epic*. Blackwell

Winkler, M. (ed.) (2015) *Return to Troy: New Essays on the Hollywood Epic*.
Brill

補遺：ウェルズリ | 詩

Fontes: Eton (1795) vol.1. pp.334-336, *errata*, Wellesley (1841) pp.38-39.

VOS VALETE ET PLAUDITE

A.D. 1779

Qualis ubi indoctus spectat de litore nauta
 undique nimborum marmora versa notis;
 surgentes fluctus stupet, et fera murmura ponti,
 et sibi tentandas pallidus horret aquas:
 Talis ego aspiciens propius vada turbida vitae 5
 atque tuos iussus linquere, Etona, sinus
 terreor, e tuto metuens excedere portu,
 et dare per vastum parvula vela mare.
 Nam mihi nunc primo in decessu nubila cerno
 multa procellosis surgere feta minis. 10
 Iam turrita comas, et maiestate tremenda
 ante oculos propior stat Rhedycina meos:
 Iam parat asperior studii doctrina severi
 corda per insolitas discruciare vices:
 Stat fronte Euclides austera, quem tremit omnis 15
 Pindus, et Aonii turba canora iugi;
 intentatque mihi chartas, quas plurima supra
 it Labyrinthis linea ducta notis.
 Quin tenui eloquio rixari, et nectere verba

arguto cogar litigiosa dolo.	20
Haec mihi iam, Rhedycina, paras, sed senior aetas (sive hiemes, placidos seu feret illa dies) condita terrificae latet in caligine noctis, quae mea me ulterius cernere fata vetat.	
Attamen haec, quo sunt magis abdita tempora vitae, heu! magis haec animo sunt metuenda meo.	25
O sacrae turres! O noti fluminis undae, silvaeque Castaliis semper amata choris! Quam vellem, tanta vacuum formidine rursus me daret in vestros vita relapsa sinus!	30
Ut piget hos saltus et dulcia linquere rura, et studio et lusu concelebrata meo! Sed me cunctantem nimium matura iuventus iam monet assuetas deseruisse domos.	
Nunc etiam extremum indulgens mihi musa laborem carmina per maestos dat modulanda pedes.	35
Nunc etiam, a dulci secessu abitura, supremum voce refert lacrimans deficiente, ‘vale’.	
Non tamen illa prius discedat, quam tibi grates reddiderit, doctum qui moderare gregem.	40
Debuit illa suas artes tibi; quae canit, hausit carmina praeceptis qualiacumque tuis.	
Nam meminisse iuvat, cum me tua prima tenellum duxit ad Aonii dextera fontis aquas; cum vix discebam multo conamine sensim legitimos digito dinumerare sonos.	45
Quin age, qui primus finxisti ad carmina vocem,	

accipe iam musae verba suprema meae;
 accipe, et auspiciis abiturum solve secundis,
 utque olim, vati nunc quoque plaude tuo. 50

4. pallidus[praescius (1841). 6. tuos...sinus[tuum...sinum (1841).
 6. linquere[linquere (*sic manu correctum in libro, cf. et errata*).
 39-40. grates/reddiderit doctum[sertum/nexuerit docilem (1841).
 26. haec[hoc (1841). 28. silvaque...choris[O silva Aoniis semper
 amica choris (1841). 32. et studio...meo[et lusu et studiis concelebrata
 meis (1841). 43. tenellum[tenellam (1795). 49. abiturum[abeuntem (1841).
 50. utque...tuo[utque soles, vati denique plaude tuo (1841).

Versio Anglica:

Just as a novice sailor watches from the shore the marble sea churning all over with signs of storm, wonders at the surging waves and savage murmurs of the ocean, and is terrified, with his face pale, by the waters which he must attempt, so I, looking at the turbid shallows of life approaching closer, and ordered to leave, Eton, your bosom, am struck with fear, afraid to leave the safe port and to set my paltry sails on the vast sea. For I discern many clouds full of stormy threats rising at the start of my departure. Already Rhedycina [i.e. Oxford], with her towering head and terrible majesty, stands close before my eyes. Already sterner discipline of severe study prepares to torture my heart through unaccustomed paths. Euclid with his austere forehead stands, before whom all Pindus and the singing crowd of the Aonian ridge tremble, and he holds out to me pieces of paper, on which runs many a line, led with Labyrinthian notes. Not only this, but I will be forced to argue with subtle eloquence, and to string together litigious words with sharp deceit. You already prepare this for me, Rhedycina [i.e. Oxford], but a more mature age (whether this will bring wintry or placid days) lies hidden

in the shadows of terrifying night, which forbids me further from looking at my fates. But indeed this period of life, as it is more hidden, alas! so is it more fearsome to my mind. Oh sacred towers! Oh waves of river known to me, and you, forest, always beloved of Castalian choirs, how do I wish that life, slipping back, would return me to your bosom, free of such great fears! How hateful is it to leave these glens and the sweet countryside, made familiar through my studies and leisure! But mature young age already warns me, while I tarry too long, to leave my accustomed home. Now too my muse, permitting me my last labour, gives songs to be modulated with sad feet. Now too she, about to leave her sweet corner, with tears, calls with her failing voice for the last time: 'goodbye'. But may she not leave before she has given you thanks, you who teach the learned crowd. She owed her arts to you; she drew her songs (whatever they are) from your precepts. For it is joyful to remember the time when your right hand for the first time drew me, yet tender, to the waters of the Aonian fount; when I learned little by little with much attempt to scan the correct sounds with my finger. But now, you who first moulded my voice for songs, accept the last words of my muse; accept, and let go the departing one with favourable omens, and as before, now too, give applause to your poet.